

担任する子どもの就学移行期を保育者はどう捉えているか — 保育者の語りの分析より —

佐藤 智恵

How does the child-care worker consider the child's school transition? :

Analysis of a child-care worker's narrative

Chie SATO

要 旨

本研究の目的は、保育所から小学校への就学の移行に着目し、保育者がどのような思いを持って子どもを小学校へ送り出し、移行の実際をどう乗り越えているのかということを描き出すことである。方法は4名の保育者にインタビューを実施し、(1)「就学準備」、(2)「保育と小学校教育の連続性」、(3)「保育観」という3つの視点より語りの抽出を行い、質的に分析を行なった。分析により、就学に向けた取り組みに関して、保育者は着席指導などが本当に必要かどうかについて疑問を感じることも「子どもが困るから」という理由から実施しているなど、戸惑いを感じることもあったことが描き出された。それぞれ自らの保育実践は熱心に取り組んでいるにも関わらず、子どもの就学に関しては、保育実践について小学校に伝達しようという意識はそれほど強くない。子どもたちは保育実践により育ってきており、それは必ずや子どもの育ちの根幹となっているであろう。表面的なスキルだけに終始せず、子どもの育ちを支えてきた保育実践の経過を伝達できるような場面が必要であると考えられる。

キーワード：保育者、小学校への移行、語り

I. 問題と目的

人生には様々な移行が存在する。移行は、新たな環境への適応という課題に直面する危機的場面(山本, 1992)であり、家庭から保育所・幼稚園、保育所・幼稚園から小学校、小学校から中学校、社会に出るまでの間、人はそれぞれの移行期を経験していく。このように数多くの移行期がある中、本研究において保育所・幼稚園から小学校への移行を扱う。その理由として、保育所・幼稚園から小学校への移行は、子どもたちが経験する大きな移行の1つ(平川ら, 2010)であり、幼児期から学童期への移行には、それまでの生活を一変

しなければならない、異なる校種間にある園文化・学校文化の違いからくる大きな環境の変化が存在する(秋田, 2002; 久田・掘越, 2009)。平成20年に改定された「保育所保育指針」、「幼稚園教育要領」、「小学校教育要領」においても、就学移行期に保幼小それぞれの保育や教育に対し情報交換し、相互理解を行うことの重要性が明記された(文部科学省, 2008; 厚生労働省, 2008)。

移行に関しては、保育者・小学校教諭の意識などについての先行研究があり、子どもの適応評価に関しては保育者と小学校教諭の間の意識に違いがないこと(盛・尾崎, 2008)、それぞれの考え

の特徴として、保育者・小学校教諭ともに、全てを自らだけで行おうする傾向がある（小林，2001）など同様の傾向もみられた。一方、渡部・加世田（2004）によると、小学校教諭と幼稚園教諭を対象として調査を行なった結果、幼稚園教諭にのみ「その子らしさ」という視点が見られ、その理由として幼児教育には小学校教育のように明確な到達目標がないことが指摘された。平川ら（2010）は、就学前の子どもの行動や態度に関して、保育者の方が情報伝達の重要性を強く認識しているなど、その意識に差異が見られることを報告した。幼稚園教諭と小学校教諭の両方の経験をしたものは、他の教師群と比較して小学1年生の指導をする際に発達段階に応じた指導の必要性をより強く認識している（進野・小林，1999a）ことや、幼稚園教諭と小学校教諭の意識を調査した結果「のびのびと生活する」という項目を両者が共通して重要と捉えているが、言葉の捉え方での相違ではないかと指摘されている（進野・小林，1999b）。これまでに述べた保育者・小学校教諭の移行に対する意識に関する研究は量的方法で行われており、移行に関する保育者や小学校教諭の一般的な考え方や意識が示されていると言える。反面、進野・小林（1999b）が述べたように移行には、量的な調査だけでは明らかにされない側面がある。北條（2010）が、幼稚園から小学校への移行の適応過程について11名の子どもの観察記録の分析を行い、移行には個人差が見られ、パターン化することはできないものであると述べたことから、質的な側面から移行を明らかにすることも必要であろう。

移行を困難にしているものの1つに、保育者と小学校教諭それぞれの移行に関する意識の違いがあることがこれらの先行研究によって指摘されているが、本研究では、まずは保育者の意識に焦点を当て、保育者がどのような思いを持って子どもを小学校へ送り出し、移行の実際をどう乗り越えているのかということを描き出すことを目的とする。

Ⅱ. 方法

保育者4名を対象として、小学校への就学移行期について個別にインタビューを行った。インタビュー時間はそれぞれ1時間から2時間、自宅や勤務先など対象者の希望する場所にて実施した。

(1) 対象者

- 1) 保育者A：R市の私立保育園に勤務する20代女性。経験年数6年目。年長児クラスはインタビューを行なった前年度に初めて担当したということである。
- 2) 保育者B：X市立保育所に勤務する40代女性。保育士としての経験年数は20年目。インタビュー当時、育休中であった。
- 3) 保育者C：Y市にある私立保育園に勤務する30代女性。知的障害者施設、児童養護施設に勤務後、現在の保育園に勤務して14年になる。現在5歳児クラスを担任している。
- 4) 保育者D：30代女性。Z町立の保育士として16年勤務した後、町内総ての保育所が民営化されたため、インタビュー当時は、役所勤務であった。

(2) 分析方法

インタビューの記録方法は、対象者の許可を得てICレコーダーで採録し、インタビュー終了後すぐに全ての語りを書き起こし逐語録を作成した。分析は、(1)小学校の移行において保育者が実施する「就学準備」について、(2)保育者が小学校との関わりにより経験する「保育と小学校教育の連続性」について、(3)自らの保育活動に影響を与えられる「保育観」という3つの視点より語りの抽出を行い、質的に分析を行なった。

Ⅲ. 分析

(1) 就学準備について

保育者からは、教師の話を聞く態度について、文字の習得など学習面など就学準備に関する語りが見られた。保育者Aは着席行動、保育者Bは「幼稚園レベル」の文字の習得などを年長児期から行うことで、就学後に子どもが「出来ずに困惑する」ことを少しでも減少できたらと望んでいるよう

ある。保育者Aは、着席行動や話を聞くことに関して、年長児の4月から意識的に保育活動の中に取り入れている。保育者Aにとって、このような事項は即座に身につくものではないと考えられていることが推測でき、長期的な計画の中で実施されたようである。また、保育者Aからは「逆に」という言葉を用いて子どもの学習面については意識して保育実践の中に取り入れなかったことが語られた。それは園の方針であるとともに、後述するとおり、保育実践の中で文字を指導することが保育者Aの保育観には受け入れ難い側面があるようだ。

一方、保育者Bは「就学後の子どもたちが困らない」ために、文字の習得など学習面に関して他の幼稚園から就学する子どもたちと同レベルの活動を行ったことが挙げられた。保育者Bは自らの保育実践において文字の指導を取り入れることに関しては全く抵抗がなかったということが語られたが、複数の同僚からは批判的な指摘がなされたということである。

保育者Cからは、当初子どもの保育活動の様子などを伝達していたのだが、それは小学校の求める情報ではないということを感じたという語りが見られた。そして、「子どもの姿を小学校教諭の求めるものに合致させたい」という内容のことが語られた。小学校の求める詳細な事項(例えば「マスクが自分でかけられる」など)に対して、子どもがそれをクリアしているかどうかを気にかけていたということである。

保育所における就学準備というものが、保育者にとっては「一定時間前を向いて座れる」ことや「ひらがなが書ける」、「マスクがかけられる」といった「スキルの獲得」の意味合いが強いことが考えられる一方で、保育者Aからは、「気分の準備」という表現で子どもの心的な側面の準備も行っていることが語られている。

小学校に上がる時に、気をつけてたのは、ちゃんと座れるかっていうことと、話が聞けるかっていうことの2つですね。私、1歳か

らずっと持ち上がりのクラスだったんですよ。それで、慣れもあるのかやっぱりどうしても、ちょっとこう…だらけるっていうか、話が聞けなかったりというのを年長になって実感したので、子どもが小学校行っても困らないように、4月の早い時期から小学校を見据えてやりました。本当はね、あんまり…「まっすぐ座りましょう」とかっていうの必要なかなあっていうのは思ってるんですけどね。(略) 逆にお勉強面はあんまり気にしたことなかったんですけど。お母さん自身もそんなにそこまで勉強、勉強っていう感じでもなかったし、ここの園もそういう方針じゃないからね。保育の中では文字書いたりする「勉強」ではなくて、小学校風に、話す時に手挙げたりして「気分の準備」っていうのはしました。(保育者A)

小学校の先生とは、昔は「保育所から来た子か…」っていうのを感じたことはあったけれど、まあマイナス面な雰囲気だね。「保育所からの子は話が聞けない」とか。保育も変わったからかな、今はなくなりましたね。幼稚園が変わったのかもね。それで、幼稚園でしていることのレベル、例えば「文字が書ける」とか「名前が書ける」位にはしていかなっていうのはあります。それは、やっぱり子どもが小学校に行った時、困らんようにしていかなっていう。なので、通常の保育にプラスして文字を書く時間を作ったりもしました。小学校から「やってください」って言われてる訳ではないんですけど。いろいろ言う先生たちもいたけど、勉強の準備的なことを保育の中ですることに対して、特に抵抗はなかった。だって子ども困るでしょ?分からなかったら。クラスで他の子はみんなもう出来てるのに、一人だけ全く知らなかったら不安でしょう。(保育者B)

連絡する時に、こっちは着席するまでのこと、例えば「友達とのかかわり」とか「活動への入り方」なんかを伝えてただけど、それでは多分情報が、学校側のニーズと合っていないっていうのを感じて…。それで、保育園で何を身につけておいてほしいかっていう所を知りたいっていうことになって。それで、ものすごく細かいことなんですけど、例えば「マスクを自分で出来るようにしてほしい」とかがね、分かってきて。「そこはうちの子は大丈夫やな」とか「できてないな…」とかこっちもチェックがね、できるっていう。(保育者C)

(2) 保育と小学校教育の連続性に関する語り

保育者B、Cの語りには、保育所と小学校の接続における保育者の微妙な心持ちが表出した。まず、保育者Cの「最後は小学校に行くっていうのが前提」という語りには、保育実践における目的と併せ、小学校就学というゴールがあるという考えが読み取れる。年長児クラスの担任を持つことが多かった保育者C(14年間で9回年長クラスを担当している)は、自らの経験を基に迷いなくこう語ったと思われる。しかし、子どもにとってよい保育とは何かを園全体で模索していることを語った時には、笑顔が見られ、表情豊かであったのに対し、このことは「仕方がない」というような一種諦めのような雰囲気の中での語りであった。保育者集団として保育実践を研鑽し、よりよい保育を行っても、就学後にそれがどのように活かされていくのかが見えない不満を感じているのではない。

保育者Bは、幼稚園教育を引き合いに出し、比較されることの多い幼稚園に対しては保育内容などの実践で張り合う気持があるということであった。保育者Bの勤務園では、乳児から保育所に入所していても、多くの幼児が年長児クラスだけは幼稚園へ通うとのことで、このような語りとなったのであろう。実際、そのことを語る際には、い

かに保育所での保育実践に自らが工夫を行っているかということが勢いよく語られた。しかし、そのように力を注いでいる保育実践についても小学校への就学においては全く語られることがなく、「明らかに違う次のステップ」、「あっちのやり方に合わない」というように、これまでの子どもの生活や遊びなどの活動経験を伝える必要性を感じていないようであった。

保育者Dからは、小学校教諭により、気になる子どもに対して発達検査が実施されたことが語られた。そこでは、検査結果が、保護者や保育所に十分伝わって来なかったことから、それが子どものためではなく、小学校教諭のために実施されているのではないかという不信感が語られた。しかし、それは同僚らとの話しに挙がるだけで、小学校側に問い合わせ出来るものではないと考えられていた。保育者Dは、障害児への対応に大変関心が高く、発達検査などの講習会にも自ら長年参加してきたということであった。その中で発達検査を行うことの意味やその扱いの難しさを感じているが故に、明確な説明もなく、子どもの発達検査を行った小学校のやり方に不信感を抱いたものと思われる。また、「小学校には問い合わせができない」ということを考えると、保育者Dの勤務する保育所にとって小学校は「遠慮」が必要な存在なのかもしれない。保育者Dの勤務する保育所は小さな町に唯一の保育施設であり、全ての在園児が同一小学校に就学するということである。そのような環境の中では、たとえ質問という形式であっても小学校の実施することに批判的なことを尋ねることは困難であったのかもしれない。

なんていうか…幼稚園とは張り合う気持があるんです。保育の内容の面でもね。その…なんというか、比べられることが多いから。小学校とはそういう気持ちはないね。小学校は明らかに違う次のステップに進むっていう感じで、「学校でついていけるように」っていう気持ちです。周りの先生も「小学校は別」っていう気持ちだと思う。だから、こっ

ちのしていることを伝えたりというよりも、あっちのやり方に合わそうっていうか合わないと…っていう。お昼寝も切り上げて文字の練習する、とかね。(保育者B)

結局ね、保育園は、最後は小学校に行くってのが前提やから。小学校行くと、環境が変わるし、友達も変わるしね。私たちにはそれは分からんでしょ。見えないからね。(保育者C)

就学時の検査で気になった子を、小学校の先生が年長の秋頃にもうちょっと詳しい検査をしてくれるんだけど、どう反映されとるのがが保護者にも私たちにもよく伝わって来なくて…(略) 子どものためでなくてただ就学のクラス分けとか担任決めのためだけのもの、先生のためのものになってるんじゃないか…というのは少し疑問に感じるところ…でもまあ言えんしね、そういうことは。(保育者D)

(3) 自らの保育観に関する語り

小学校への就学への語りの中で、自己の保育観に関する語りが見られた。保育者Aは、自らの学童期のことを語る中で、その頃の出来事が現在の自分の保育に少なからず影響を与えていると語った。また、保育の中で学習的な活動を取り入れることに対する否定的な考えを、勤務園の園長の「保育園時代にしか出来ないことがある」という言葉で表わしている。ここには、保育者Aの勤務園の方針が強く表れており、保育者Aがそのことに共感し、就職先として選択したという側面がうかがえる。

また、保育者Dは、現在の自らの子育て経験の視点から、過去の保育実践をふり返っている。保育者Dによると、「内弁慶でおとなしい」わが子を育てる中で、自らが担任していたおとなしい子どものことを想起するということだ。現在は保育

実践の場を離れているからこそ、そのことを強く感じるのかもしれない。このように、保育者自らの経験は、それぞれの保育実践に影響を与えているようである。

ここの園はお勉強的なことは今までもなかったし。遊びの中で数字とか文字に関心が持てたらいいという方針、そういうやり方なので、もし文字を教えたりすることを求められても私自身は、多分「しなきゃ」というふうには思わなかったと思います。私はそういうことにちょっと抵抗があるのかもしれない。私自身が小さい時から勉強させられてきたので…自分は嫌やったけど親が言ったから反論せずにやってたところもあって。最近、母親から「あんたはおとなしい子やったけど、反抗期が長かった」って言われたんです。そういう気持ち、小さい時のね、そういうのが今の保育に影響してるのかなあ。就職の時に、私がね、ここの園を見学に来させてもらった時に、子どもがのびのび遊んでたことや、園長先生が「保育園の時代にしか出来ないことがあるからね」っていうお話を聞いて「いいな」って思うことがあったりして。(保育者A)

あんまり問題にされんですけど、繊細な子をどう小学校に送っていくのかは難しいかな。やっぱりそういう子って埋もれてしまうから、気にしないと気にならないから。色々手のかかる子は、なんといっても、やっぱり手をかけてもらえるんよね。私…わが子のこと見てて、もっとおとなしい子のことちゃんと見てやらな、手をかけてやらなアカンかったなって思う。やっぱり思い出すんよね、おとなしいタイプの子のこと。なかなか見えてなかったな～って。あの子の気持ちほんとにちゃんと分かってたのかなあというのは今となってすごい思う。もう一回あの仕事が出来

たらそこは絶対やりたい。(保育者D)

このように、就学に向けた取り組みに関して、保育者は着席指導などが本当に必要かどうかについて疑問を感じながらも実施したことや、「子どもが困るから」という理由から実施しているなど戸惑いを感じることもあったようである。そして、それらの活動は、子どもの育ちに必要不可欠なものとして保育計画の中で展開されたというよりは、「小学校教諭の求める力を就学までに身につかせねばならない事項」という位置づけになっていたのではないか。ここからは、就学後の子どもの困難な状況をなるべく軽減させたいという保育者のいわば「親ごころ」とも言うべき心持ちがうかがえる。保育者らはそれぞれに自己の保育を振り返ったり、よりよい保育を行おうと熱心に保育実践を行っていることが語りからうかがえた。しかし、一方では、子どもの就学に関しては、自らの保育実践について小学校に伝達しようという意識はそれほどうかがえなかった。短時間での情報伝達のためにそこまで伝えられないという実情も予想できるが、保育者の中に「小学校の求める保育活動を行っていることを伝達することが当然」であり、これまで自らが行ってきた多様な保育実践を伝達することをそれほど重要視していないのかもしれない。しかし、子どもたちはこのような保育実践により育ってきており、それは必ずや子どもの育ちの根幹となっているであろう。表面的なスキルだけに終始せず、子どもの育ちを支えてきた保育実践の経過を伝達できるような場面が必要であり、またそれを「伝達すべき事項」と保育者自身が感じられるような土壌の育成が、保育の質の向上へと繋がるのではないだろうか。

引用文献

- 秋田喜代美 (2002) 幼小の連続的な育ちと保育・教育内容. 保育学研究, 40(2), 149-151.
- 平川昌宏・西野美佐子・大関信隆 (2010) 保育者・小学校教員における情報伝達の重要性の認識に関する研究—小学校への移行時における子どもの共通理解をめざして—. 感性福祉研究所年報, 11, 83-92.
- 久田友佳・掘越紀香 (2009) 幼稚園から小学校への移行期における教師の対応の変容. 大分大学教育福祉科学部附属教育実践総合センター紀要, 27, 21-38.
- 北條友子 (2010) 幼稚園から小学校への移行期における子どもの適応過程に関する事例研究. 大妻女子大学家政系研究紀要, 46, 175-177.
- 小林真 (2001) 幼稚園教諭・保育士と小学校教諭の間に見られる子どもに指導すべき目標についての意識の違い. 富山大学教育学部紀要, 55, 73-78.
- 厚生労働省 (2008) 保育所保育指針
- 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領 小学校学習指導要領
- 盛真由美・尾崎康子 (2008) 幼稚園から小学校への移行における適応過程に関する縦断的研究. 富山大学人間発達科学部紀要 2(2), 175-182.
- 山本多喜司 (1992) 人生移行の発達心理学. 北大路書房.
- 進野智子・小林小夜子 (1999a) 幼稚園から小学校への移行に関する発達心理学的研究Ⅱ. 長崎大学教育学部紀要—教育科学—57, 91-106.
- 進野智子・小林小夜子 (1999b) 幼稚園から小学校への移行に関する発達心理学的研究Ⅰ. 長崎大学教育学部紀要—教育科学—. 56, 63-70.
- 渡部玲二郎・加世田直巳 (2004) 幼稚園教師と小学校教師の子どもをみる視点について—子どもの幼稚園から小学校への円滑な移行の一助として—. カウンセリング研究, 37, 124-134.